

第2節 青少年の逸脱行動と家族

(1) 逸脱行動と家庭生活満足度

では次に、青少年の逸脱行動と家庭環境との関係について見てみよう。逸脱的行動をする青少年と逸脱的でない青少年の家庭環境にはどのような違いがあるのだろうか。

調査では、第1章で明らかにしたように、逸脱行動を14あげ、そうした行動をした経験があるかどうか「まったくない」「1・2度ある」「時々ある」「よくある」の4段階で回答してもらった。この14項目の質問それぞれへの4段階の回答を重み付けした上でたしあげ、逸脱を4段階に分けた逸脱度変数2を作成したが、この逸脱度変数2を用いて、逸脱行動と家庭環境の関係をみていくことにしよう。

表4-6は、逸脱度別に「家庭生活への満足度」、「家庭への不満の内容」、「家庭環境」を示したものである（「家庭生活への満足度」は「満足」と「やや満足」をたしたもの、「家庭環境」は「とてもあてはまる」と「少しあてはまる」をそれぞれたしたもの）。また表には参考として、全体の数値、「非逸脱群（A）」と「逸脱大群（B）」の差、また大学進学率AとDの値の差を載せた。これらの数値を検討し、逸脱行動と家庭の関係について探ってみよう。

表4-6 逸脱度別、家庭生活満足度・不満内容・家庭環境 (%)

	非逸脱群 (A)	逸脱小群	逸脱中群	逸脱大群 (B)	B-A	全体	大学進学率 D-A
家庭生活満足計	83.4	74.3	66.0	63.1	-20.3	75.5	-10.1
こずかいが少ない	16.4	25.9	31.5	34.6	+18.2	24.3	+3.1
家庭の収入が少ない	16.6	22.3	33.8	27.8	+11.2	22.3	+14.0
家が狭すぎる	18.1	22.0	26.1	18.4	+0.3	21.0	+5.9
親が自分を理解してくれない	10.5	13.5	22.3	26.9	+16.4	15.3	+3.9
家庭内の争い	10.4	13.7	18.8	17.5	+7.1	13.5	-2.4
父親と自分がうまくいっていない	10.9	13.7	15.9	18.4	+7.5	13.2	-1.9
ほしい物をかってくれない	7.0	11.7	18.5	21.4	+14.4	12.2	+6.3
親同士がうまくいっていない	7.2	12.6	17.5	11.5	+4.3	11.0	+3.2
きょうだいと自分がうまくいっていない	8.0	9.1	13.7	12.8	+4.8	9.6	+2.4
母親と自分がうまくいっていない	3.8	5.0	8.9	13.2	+9.4	6.2	+2.0
合計	108.9	149.5	207.0	202.5	+93.6	148.6	+36.5
家に帰るとほっとする	93.8	90.7	86.8	82.6	-11.2	90.4	-1.9
よくおしゃべりする	86.6	80.1	77.0	62.3	-24.3	80.1	-1.0
家族は仲がよい	88.9	82.4	76.4	71.4	-17.5	82.7	-5.4
我が家は豊かなほう	71.1	65.8	57.4	55.7	-15.4	65.3	-13.3
合計	340.4	319.0	297.6	272.0	-68.4	318.5	-21.6

まず家庭生活の満足度をみると、「非逸脱群」から「逸脱大群」へと逸脱の程度が進むにつれて満足度は低くなり、「逸脱大群」と「非逸脱群」の差をみると20.3ポイントとな

る。全体75.5%と比較すると「非逸脱群」は満足度が7.9ポイント多いのに対し、「逸脱大群」は12.4ポイント少ない。この差は大学進学率AとDの差10.1ポイントの約2倍であり、逸脱行動と家庭生活満足との間には、今回取り上げた他の属性に比べ強い関連があることがわかる。

また具体的な不満内容をみると、どの項目でも「非逸脱群」に比べ「逸脱大群」の不満は大きく、特に「こづかいが少ない」「親が自分を理解してくれない」「ほしい物をかってくれない」で「非逸脱群」と「逸脱大群」の差が大きい。また、大学進学率のAとDの差と比較してもこの3項目の差が大きいことがわかる。しかし、全ての項目で不満度の高まりと逸脱の程度が比例関係を示しているわけではなく、全10項目中半数の5項目で「逸脱大群」よりも「逸脱中群」の値の方が高くなっている。この点を考えると、逸脱行動と家庭についての不満を単純に結びつけることには問題があるように思われる。

最後に家庭環境についての4項目は、逸脱の程度が高いほど家庭環境評価が低い、という関係がはっきりみられる。しかし「逸脱大群」で最も数値が低い「我が家は豊かなほうだと思う」も半数以上があてはまると答えており、この質問によって「逸脱大群」で家庭環境に問題があるとはいうことはできないと考えられる。

(2)逸脱行動と父親・母親関係

次に、逸脱行動と父親・母親関係とはどのように関連しているのかをみていこう。表4-7は、父親・母親との関係をそれぞれたずねた結果について、調査対象者全員の値、「非逸脱群」「逸脱大群」の値と全体との差を載せたものである。また「大学進学率D」についても数値と全体との差を参考のために載せた。

まず、「非逸脱群」に注目すると、父親との関係では3項目を除いた残り10項目、また母親との関係でも同じく3項目を除いた残りの10項目で全体の数値よりも高くなっている。全体よりも少なかった項目は、「しつけはきびしい」「期待を負担に感じる」「小さいときにたたかれたりなぐられたことがある」「全然かまってくれない」という、ネガティブな評価を示すもので、その点から考えると、「非逸脱群」の青少年と父親、母親との関係は全体に比べより良好なものといえることができる。

それに対し「逸脱大群」は、逆に父親、母親とも3項目を除いて全体よりも少ない値を示しており、父親、母親に対しては、全体よりもマイナスの評価や関係が作られているといえる。特に全体と差が大きかったのは、父親、母親ともに「私は父(母)親から信用されている」「父(母)親にしかられるのはこわい」「父(母)親の信頼を裏切るようなことはしたくない」であり、「逸脱大群」では、全体と比べると、親から信用されておらず、親にしかられるのはこわくなく、親の信頼を裏切るようなことをしたくないという気持ちが少ない、ということになる。また参考にあげた大学進学率Dと全体との差をみると、差が10ポイントを超えるものはない。また差が比較的大きかったものは「父親は欲しいものはたいてい買ってくれる」、「母親には見習いたい点がある」である。どちらも全体よりも低い値を示しているが、内容は「逸脱大群」とは全く異なることがわかる。これらの点から考えると、「逸脱大群」では親との信頼関係がうまく築けていない、また親が青少年の逸脱行動を押しえる力となっていないといえる。ただし、「逸脱大群」の数値が低いといってもある一部の項目を除き、大幅に全体を下回る項目は少ないという点には注意

する必要がある。

表4-7 逸脱度別、父親・母親との関係 (上段:%、下段:全体との差) (%)

	父親				母親			
	全体	非逸脱群	逸脱大群	大学進学率D	全体	非逸脱群	逸脱大群	大学進学率D
父(母)に大切にされている	82.3①	86.9① 4.6	74.4① -7.9	80.7 -1.6	87.6②	90.9② 3.3	80.2② -7.4	86.0 -1.6
父(母)の信頼を裏切るようなことはしたくない	72.5②	80.5② 8.0	62.4⑤ -10.1	71.0 -1.5	79.2④	84.5③ 5.3	69.7⑤ -9.5	77.8 -1.4
父(母)は結果だけでなく努力を認めてくれる	70.4③	74.5④ 4.1	68.2② -2.2	68.3 -2.1	78.0⑤	81.1⑦ 3.1	74.1④ -3.9	77.2 -0.8
父(母)は話を聞いてくれる	69.7④	74.4⑤ 4.7	63.0④ -6.7	68.7 -1.0	90.7①	92.3① 1.6	87.7① -3.0	88.9 -1.8
父(母)から信用されている	68.6⑤	76.8③ 8.2	52.4⑦ -16.2	64.2 -4.4	74.2⑦	82.8⑤ 8.6	54.2⑦ -20.0	69.8 -4.4
最後に味方になってくれるのは父(母)だと思う	64.3⑥	67.6⑥ 3.3	64.3③ 0.0	63.2 -1.1	81.7③	84.5③ 2.8	78.1③ -3.6	79.6 -2.1
父(母)には見習いたい点がある	63.4⑦	66.9⑦ 3.5	60.5⑥ -2.9	59.8 -3.6	75.5⑥	82.1⑥ 6.6	66.2⑥ -9.3	66.9 -8.6
父(母)にしかられるのはこわい	57.0⑧	63.9⑧ 6.9	46.9⑨ -10.1	55.6 -1.4	37.6⑩	48.3⑨ 10.7	19.4⑫ -18.2	31.9 -5.7
父(母)のしつけはきびしい	47.9⑨	47.8⑨ -0.1	49.3⑧ 1.4	50.9 3.0	50.4⑧	54.0⑧ 3.6	42.1⑧ -8.3	46.6 -3.8
父(母)は欲しいものはたいてい買ってくれる	39.6⑩	43.3⑩ 3.7	33.2⑩ -6.4	30.8 -8.8	40.8⑨	44.5⑩ 3.7	35.7⑩ -5.1	36.3 -4.5
父(母)の期待を負担に感じることがある	27.5⑪	29.0⑪ 1.5	32.9⑪ 5.4	28.7 1.2	34.2⑪	33.9⑪ -0.3	37.9⑨ 3.7	31.2 -3.0
小さい時に父(母)にたたかれたりなぐられたことがある	25.8⑫	20.6⑫ -5.2	32.9⑪ 7.1	27.7 1.9	25.2⑫	23.4⑫ -1.8	30.3⑪ 5.1	25.2 0.0
父(母)は全然かまってくれない	17.1⑬	14.1⑬ -3.0	23.2⑬ 6.1	18.2 1.1	10.2⑬	8.8⑬ -1.4	11.9⑬ 1.7	12.8 2.6
合計	706.1	746.3 +40.2	663.6 -42.5	687.81 -18.3	765.3	811.1 +45.8	687.5 -77.8	730.2 -35.1

次に、比率が高かった順につけた順位に注目してみよう。まず父親との関係を見ると、「逸脱大群」では、全体と「非逸脱群」で2位であった「父親の信頼を裏切るようなことはしたくない」が5位である。また全体では5位であった「私は父親から信用されている」が「逸脱大群」では7位に、「非逸脱群」では3位にきており、差が大きい。このように、順位の数でも「逸脱大群」と「非逸脱群」の差が大きいものがある。

また、「逸脱大群」で順位が特徴的に高かった項目を見ると、「最後に味方になってくれるのは父親だと思う」が、全体、「非逸脱群」で6位であるのに対し3位にきており、数値の点でも全体と全く差がない。さらに「父親は結果だけでなく努力を認めてくれる」も「逸脱大群」では2位であるのに対し「非逸脱群」では4位であり、順位の差がみられる。「逸脱大群」は父親を信頼してはいないが父親に依存する気持ちがあることを示していると考えられ、この点に「逸脱大群」の特徴を見出すことができる。

次に母親との関係をみると、父親ほど大きな違いは見られない。比較的差が大きかったのは「母親にしかられるのはこわい」で、全体10位、「非逸脱群」9位に対し、「逸脱大群」では12位であり、母親の権威は逸脱度の大きい青少年にはあまり認められていない。

以上の結果をまとめると、逸脱の程度が高い青少年はそうでない青少年に比べ、父親・母親との信頼関係をうまく築けていない傾向がみられ、また親をこわい存在としても強く考えていないが、他方、特に父親に対する依存の姿勢もみることができ、親との信頼関係が築けていないものの完全に親から独立しているわけでもない様子がみえてくる。

(3) まとめ

さて、ここでこれまでの結果を簡単にまとめておこう。

① 青少年の家庭生活

・ 家庭生活満足度

満足計は75.5%（「満足」32.6%、「やや満足」42.8%）と高い数値を示し今回の調査対象者の4分の3が現在の家庭生活に満足している。

・ 家庭生活への不満（11項目）

どの項目も30%を上回る項目はなく、現在の青少年が共通にもつ家庭への不満の内容を指摘することはできない。上位に挙げられているのは、「こづかいが少ない」「家庭の収入が少ない」「家が狭すぎる」といった家庭の物理的生活環境に関するもので、不満の内容も非常に深刻なものとはいえない結果である。

・ 家庭環境（4項目）

「家に帰るとほっとする」「家族でよくおしゃべりする」「私の家族は仲がよい」「我が家は豊かなほうだと思う」の4つの項目で質問しているが、「我が家は豊かなほうだと思う」以外の3項目で80%を超えており、今回の調査対象となった青少年の多くの家庭では、円満な家庭環境が作られているといえる。

・ 父親・母親との関係

父親、母親との関係は決して悪くなく、「私は父親（母親）に大切にされている」と答えた割合はそれぞれ8割を超えており、また「父（母）親の信頼を裏切るようなことはしたくない」、「父（母）親は結果だけでなく努力を認めてくれる」も肯定している者がそれぞれ7割を超えている。また「父（母）親には見習いたい点がある」という親をモデルにしたいという青少年もそれぞれ6割を超える。さらに「父（母）親のしつけはきびしいほうだと思う」と答える青少年は父親、母親ともに約50%であり、約半数の家庭で子どもが厳しいと感じるしつけが行なわれていることがわかる。

② 逸脱度別にみた家庭生活

- ・家庭生活満足度

家庭生活の満足度をみると、逸脱の程度が進むにつれ満足度は低くなり、全体75.5%と比較すると、「非逸脱群」は満足度が7.9ポイント多いのに対し「逸脱大群」は12.4ポイント少ない。

- ・家庭生活への不満

具体的な不満内容をみると、どの項目でも「非逸脱群」に比べ「逸脱大群」の不満は大きくなっている。特に「こづかいが少ない」「親が自分を理解してくれない」「ほしい物がかってくれない」で「非逸脱群」と「逸脱大群」の差が大きい。しかし全ての項目で不満度の高まりと逸脱の程度が比例関係を示しているわけではなく、全10項目中半数の5項目で「逸脱大群」よりも「逸脱中群」の方の値が高くなっている。

- ・家庭環境

逸脱の程度が高いほど家庭環境評価は低い傾向にある。

- ・父親・母親との関係

「逸脱大群」は、父親、母親とも3項目を除いて全体よりもプラスの評価が少ない値を示しており、父親、母親に対しては逸脱度がより小さい群よりもマイナスの評価や関係が作られているといえる。特に全体と差が大きかったのは、父親、母親ともに「私は父（母）親から信用されている」「父（母）親にしかられるのはこわい」「父（母）親の信頼を裏切るようなことはしたくない」であった。

第3節 家庭生活からみた非行原因の認識

さて本調査では「少年・少女が非行に走るの、どこにその原因があると思いますか」という質問をし、「本人自身」「家庭（親）」「友達・仲間」「その他」という選択肢をあげ答えてもらっている。表4-8はその結果であるが、非行の原因として「逸脱大群」は「本人自身」を第一に挙げ、「非逸脱群」は「家庭（親）」を第一に挙げている。また「本人自身」の項目をみると、逸脱の程度が大きいほど非行の原因が「本人自身」にあると考える者が多く、「家庭（親）」にあると考える者は、逸脱の程度が大きいほど低いことがわかる。

表4-8 逸脱度別、非行の原因 (%)

	本人自身	家庭（親）	友達・仲間	その他
非逸脱群	35.4	37.3	13.1	14.2
逸脱小群	35.6	34.2	14.9	15.2
逸脱中群	38.1	31.0	17.7	13.2
逸脱大群	43.4	22.1	23.8	10.6

「非逸脱群」が青少年の非行の理由を第一に「家庭（親）」をあげていること、また「逸脱大群」が「本人自身」をあげているのはなぜなのだろうか。先に検討した家庭生活への満足と、自分自身に関してどのように感じているかをたずねた14の質問の中の「私は能力には自信があるほうだ」の回答を検討しながら考えてみたい。

表4-9は家庭生活への満足度を逸脱度別に示したものである。この質問については先

に触れているが、逸脱度が大きいほど家庭生活への満足度が低くなる傾向がみられる。また表4-10は自分の能力に対する自信をたずねているが、こちらは逸脱度が大きい群ほど能力に自信があると思っている者が多い。

この結果を非行原因の回答と結びつけるとどのようなようになるのだろうか。逸脱の度合いの低い「非逸脱群」は、非行の原因を家庭にあると考えているが、彼ら自身の家庭生活への満足度は高い。また逸脱の度合いの大きい「逸脱大群」は、非行の原因を本人自身にあると考えており、自分の能力への自信は高い。このようなデータを解釈するためには、さらに詳細な分析が必要であると考えるが、ここでは可能な解釈を提示しておきたいと思う。

表4-9 逸脱度別、家庭生活満足度 (%)

	満足	やや満足	やや不満	不満
非逸脱群	40.4	43.0	13.7	2.9
逸脱小群	29.9	44.3	18.3	7.5
逸脱中群	23.0	43.1	25.5	8.5
逸脱大群	24.6	38.6	23.7	13.1

表4-10 逸脱度別、「私は能力には自信があるほうだ」 (%)

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう は思わない	全くそう は思わない
非逸脱群	4.7	25.1	56.7	13.4
逸脱小群	5.9	30.7	51.4	12.0
逸脱中群	6.9	29.4	47.7	16.0
逸脱大群	11.3	31.1	40.1	17.6

考えられることは以下のようなものである。実際に逸脱行動を起こしている「逸脱大群」は、逸脱行動を止める存在として家族が機能しなかったことを経験している。この経験は、家族への不信へとつながるが、逸脱行動を起こしたことに対しては結果的に原因を自分自身に求める以外になく、非行の原因が本人自身にあると考えざるを得ない。また、「逸脱大群」にみられる自己の能力に対する自信の高さは、自己を過大視し逸脱行動へと向かわせることにつながっているとも考えられる。また「非逸脱群」の場合は、実際に逸脱行動を経験しておらずその判断の基準は「逸脱大群」とは当然異なると考えられるが、原因を家族と考えるということは、逆に家族が逸脱行動を防ぐ防波堤となるという考えをあらわしているのではないだろうか。そして、家族への満足感や信頼感がこうした考えを生み、支えていると考えられるのではないか。

いずれにしろ、非行の原因をたずねた質問に対する青少年の回答は重要であり、「非逸脱群」が家族に、また「逸脱大群」が本人に非行の原因を求める理由について多様な観点から詳細な分析を進めていく必要があるだろう。家族との関係でいえば、家庭生活に満足し、家庭環境が良好で親との関係がうまく築かれている青少年に、なぜ逸脱行動が生じにくいのかということ問うことになる。彼らが家族を信頼していることが、結果として家族が逸脱抑制的な機能を果たすことになっているように思われる。それに対して家族に対する信頼が比較的少ない「逸脱大群」の青少年からは、頼るものは自分しかないという声が聞こえてくる。このように家族関係から青少年の逸脱行動にアプローチしていくと、「なぜ人は

逸脱者とならないのか」という社会統制的観点から逸脱行動を説明していくことが有効であると思われる。家族の機能の一つに、子どもに対して社会の価値規範や慣習を内面化させる（しつけ）という「子どもの社会化」機能があるとされているが、子どもの逸脱を防ぐためにはこの社会化機能の遂行だけでなく、家族の紐帯を強めるということが重要であることを本調査結果は改めて示しているように思われる。